Monthly　この街と生きていく。

信用金庫

毎月1回10日発行
平成23年7月1日
7
2011
July

特集　商店街活性化と信用金庫
●足立基浩　●アルプス中央　●福島明夫　●石塚克彦

地域特性を生かした自律型地域再生に向けて●吉田敬一

被災者に雇用を創出する復興を●今　一生

第14回信用金庫社会貢献賞●櫪野信治●全信協広報部

シリーズ　信用金庫法制定60周年⑤●桑島俊彦

私の経営理念・経営方針●稲田精治

シリーズ地域社会の持続的発展に向けて㊻●山口勝洋

若手経営者の団結力に火をつけた博物館誘致

アルプス中央信用金庫

はじめに

当金庫は、長野県南部に位置し、南アルプスと中央アルプスに広がる地域を営業エリアとしている。この地域は、かつて〝伊那テクノバレー〟と呼ばれるほどの精密機械工業地帯として栄えていたが、現在では、円高とこれに伴う国内産業の空洞化、若年層を中心とする失業率の上昇、中小企業の減少など、構造変化の影響を大きく受け、地域経済は停滞している。

1 取り組みの経緯

当金庫営業地域の市町村は、高齢化と各市町村の商店街の衰退に歯止めがかからない状況にあることから、地元信用金庫として商店街にかつてのにぎわいを取り戻すためのお手伝いができないかと考え、商店街の活性化を課題に取り組むことを決めた。

まず、当金庫担当者と提携コンサルタント会社とによる各商店街の視察を行って情報収集に努めた結果、適する商店街として宮田村商店街と伊那市高遠（たかとお）町商店街を選定し、説明と協力依頼のため平成20年6月に両市町村の商工会を訪問した。非常に興味を示してくれたのが伊那市商工会であり、同年7月に「高遠町商店街活性化事業打ち合わせ会議」を開催した。

出席者は、商工会会長以下、商業部会、青年部の関係者のほか、地域を代表して高遠町地域協議会商工会代表も参加した。

まず参加者から、なぜこういった取り組みがなされるのか、また、なぜ高遠町商店街なのかという質問があった。それに答えて、当金庫から「平成20年度地域密着型金融推進計画」の取り組みのなかで商店街の活性化を課題の1つとして取り組むこととなったが、商店街の視察をしたところ、まち並み整備が完了し商店街の形が色濃く残っていること、他に比べて比較的若い後継者が多いことから高遠町商店街を選んだことを伝えた。

高遠町では、桜の時期には県内外から30万人を超える観光客がありながら、商店街への恩恵が少ないのが現状であり、どうしたら花見客に商店街に足を運んでもらえるのかという大きな課題を抱えていた。そこで、商工会会長以下、参加者は当金庫の提案に理解を示し、真剣に商店街活性化に取り組む決意を固められた。

こうして活性化の推進モデルを伊那市高遠町商店街と決定したのである。

2 実行に向けての行動展開

■実行委員会の立ち上げ

先の会議の中で、外部コンサルタント関係者により、全国の活性化事業の成功事例、失敗事例が報告された。

成功のポイントとして、次の4点が上げられた。

①コアとなるリーダーが存在すること（強い意志を持って引っ張る人）

②実際に実務をこまめにできる人がいること（目に見えない推進役）

③人が滞留する時間が大切（食に通じるものがあること）
④高齢者でなく若い人たちで取り組むこと

これらを参考に検討を進めるなかで、一例として「北原照久おもちゃ博物館」の存在が示された。ブリキのおもちゃコレクターの第一人者である北原照久氏は伊那市の「ふるさと大使」でもあることから、打診は可能である。こうして自然と「『おもちゃ博物館』誘致による活性化策」という大きな方向性が承認され、計画が動き出した。

計画の実行には商店街のまとまりが基本的に重要であることから、商店街の後継者である商工会青年部を中心とした委員長以下7名の実行委員会を立ち上げ、メンバーで夜間に幾度となく研究会が開かれた。

当初、話題の中心は、商店街の店舗経営者としては当然ながら、自店の売上に結びつくのかであった。各商店は、お互いのことを知っているようで実はよく知らなかったことも研究会でわかった。

そこで、計画自体が商店街の人たちがお互いをよく知るきっかけとなり、個店の問題ではなく、地域全体の問題として捉え、決して単なる〝打ち上げ花火〟にならないよう関係者一同で話し合いが続けられた。最終的には、商工会青年部の若手経営者が商店街全体を動かすことになった。

■博物館の誘致活動

同年8月には、地元実業団長への説明を行って了解を得、誘致実現に向けて各関係者からアドバイスを得ながら、北原照久氏の了解をとるべく多方面からコンタクトを取っていった。

最終的には、平成21年1月、北原氏に面談して直接協力依頼をするため、商工会会長をはじめ商工会関係者3名、行政として高遠町自治区長、および当金庫から2名の計6名で、神奈川県横浜市にある北原氏経営の株式会社トーイズを訪れた。

結果として、高遠町へ商品を搬入し、おもちゃの展示および販売をすることについて北原氏の快諾が得られた。そこで具体的な方向を検討し、地元商店および関係者の賛同・協力を得て、受け入れ態勢の構築へと話を進めることとなった。

打ち合わせの中で、北原氏からもいろいろと取り組みやすいご提案があった。おもちゃ博物館だけではなく、商店街各店舗内のスペースに北原氏のコレクションを展示することで、おもちゃを通じてお客さまと商店とがふれあうきっかけとなり、商店は高遠町のすばらしさを伝えられるのではないか、というものだった。

各商店への展示は全国で初めての試みであるうえ、高価なおもちゃもあることから、防犯上の問題などもある。商工会関係者も悩み、決めかねていたが、最終的に当金庫経営改善支援室担当者が強く後押しすることにより、北原氏の提案を受け入れることとなった。

■展示会場の選定と支援金申請

メインとなる会場は空き店舗を利用することになり、当金庫担当者、提携コンサルタントが商工会関係者に同行して商店街を視察した。

その結果、商店街の中心に位置し、近くに無料駐車場がある空き店舗（旧スーパーマーケット）が規模的にもよいと判断し、商工会会長が交渉をして借りることができた。

事業を進めるうえで非常に大きなポイントである資金面については、当金庫担当者が商工会の経営指導員と同行して関東経済産業局地域力連携拠点コーディネーターに相談をした。伊那市、地方事務所など行政からもご協力をいただき、県の「地域発　元気づくり支援金事業」に応募してもらうことを決定。事業名を「開運！北原照久おもちゃ博物館　特色ある観光地づくり」とし、支援金の交付を受けることができた。

北原氏の承諾も得られたことから、商工会関係者も交えて具

体的開催方法を幾度となく話し合った。研究を重ねた結果、開催時期および開催内容などの具体的方向性が次のように固まった（別掲）。

〈別掲〉

事業の概要

(1) **事業目的**

高遠地域が生き残る唯一の資源である「観光」に注目し、「花の高遠」というブランドの強みを再認識し、地域に新しく生まれた「古本屋」「アジア諸国の民芸品店」「バラ園」などの新しい観光資源を活用した地域活性化について、地域が真剣に考え、具体的な取り組みを始めるきっかけづくりを目的とする。

(2) **事業内容**

開催時期

平成21年4月5日から5月10日まで

観桜期、およびゴールデンウイークに合わせて開催

開催内容

①オープン前日の4月4日にオープンセレモニーを実施する。

②商店街の空き店舗を利用して「おもちゃ博物館」をオープンする。

③商店街の各商店にもブリキのおもちゃを展示する。

④期間中スタンプラリーを実施する。

（各商店を回って5つスタンプを集めると、抽選で北原照久氏監修のおもちゃをプレゼント）

⑤開催最終日の5月10日には北原照久氏の講演会・パネルディスカッションを開催する。

（入場無料）

おもちゃの「お宝鑑定」・抽選会・講演会・パネルディスカッション・サイン会を催す。

⑥広報活動に力を入れる。

3 取り組みの結果と効果

こうしておもちゃ博物館の展示開催にこぎつけ、4月4日には市長をはじめ市会議員、当金庫理事長、商工会関係者などによるテープカットが行われた。

横浜から搬入されたのは、北原照久氏のコレクションである戦前、戦後の貴重なブリキのおもちゃ約400点。これらをケース入りで展示し、同時にブリキのおもちゃ販売コーナーも併設した。昔懐かしい絵本、怪獣映画のポスターも展示して「おもちゃ博物館」（有料：大人200円、小・中学生100円、未就学児は無料、ただし保護者同伴）をオープン。博物館の入り口は休憩所として無料開放し、飲み物を提供してゆっくりと休んでいただくようにした。

また、商店街全体を「おもちゃの街」と見立て、地域が一体となって誘客を図る事業に賛同した25店舗は、費用1万円を負担してブリキのおもちゃを展示した。これには、北原氏自身が各商店に合った展示品を選定し、運搬、展示は㈱トーイズのスタッフが行った。万が一のことを考え、全展示品に保険をかけて、万全の体制を敷いた。

商店街で行ったスタンプラリーへの応募者は781名となり、普段と違って商店街のまとまりが生まれたこと、若手経営者の熱意とやる気を高めることなどの効果があった。

例年、お花見時期に観光客が商店街を歩く姿はほとんど見られなかったが、伊那市の協力で県内外に配布する「高遠城址公園さくら祭りマップ」の中に「おもちゃ博物館」が掲載されたこと、公園内6ヵ所に看板を設置し、スタンプラリーのチラシを観光客へ配布するなどした結果、商店街を散策する人が増え、活気ある商店街となった。「おもちゃ博物館」への有料入場者数2126名は、ほとんどが観光客であった。

各商店に設置したブリキのおもちゃも功を奏した。観光客を

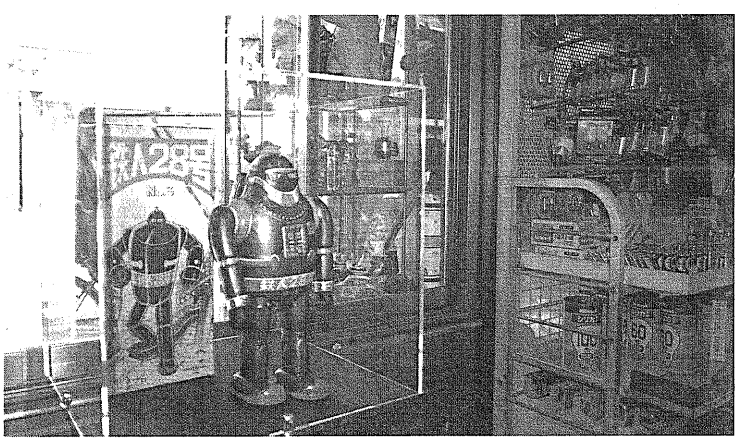
迎える商店主と従業員は、お客さまを迎える挨拶に始まり、自分の店舗商品の丁重な説明など、あらためてお客さまサービスの原点を見直す機会にもなった。

北原氏は、「元気の出る話」と題した講演で数々の夢を実現してきた人生を振り返りながら、プラス志向であきらめずにチャレンジしていく大切さを熱く語った。

続いて開いた「お宝鑑定」で北原氏は、来場者が持ち寄ったミニカーなどを鑑定し、「箱の状態が良ければもっと高値がついた」などとコメント。パネルディスカッションでは、「全国的に不況だ、過疎化だ、何とかしなきゃいけないというなかで、活性化に向けて一歩踏み出したことはすばらしい。今後もまちづくりのアドバイスをしていきたい」とエールをくださった。

講演会・パネルディスカッション入場者数は151名であった。

本事業は、新聞、テレビの報道により、商店街への関心、興味が高まったことで、通年観光の足がかりが築けたものといえる。地元金融機関としては、金融取引だけでなく地域活性化推進にも取り組んでいることを広く地域に認めていただくよい機会となった。



博物館だけでなく、商店街の各店舗内にも貴重なブリキのおもちゃが展示された

4 今後の課題

結果として地域の皆さまたちの賛同を得て「おもちゃ博物館」を誘致することができ、活性化の起爆剤となったことは、協力させていただいた当金庫としても、大変喜ばしいことだった。

本事業がきっかけとなって、平成21年10月には春と同じ場所で「おもちゃ博物館」と「高遠焼き」の展示、地元特産品販売が行われたほか、翌年4月にも、「街なか博物館」として各商店に眠るお宝を展示するなどの事業が継続されている。また、新たに高遠町ブックフェスティバル実行委員会主催によるブックツーリズムを基本とするまちおこしプランがスタート。今後、地域に根ざした運動になっていくことが期待される。

寄稿にあたり、伊那市商工会会長をはじめ取材にご協力いただいた方々に感謝申し上げるとともに、金庫として今回のノウハウを蓄積し、「つなぐ力」をさらに深化させて他の商店街活性化につながる取り組みを進めていきたい。

（審査部経営改善支援室
主任調査役　原　章）

伊那市商工会会長のコメント

ブリキのおもちゃを商店街の各店舗に展示することは日本初のイベントであったこと、商店街の人たちが皆協力し合って気持ちが一つになっていったことを考えると、数字では表せない効果がかなりあったように感じられた。

信金さんは、伝統であるのか、昔から支店の職員さんが商工会の事業に積極的に参加してくださり、催し物もご夫婦で見に来てくださる。今回の事業は、商店街の皆さんが、普段からそんな信金さんの姿を見て感じているものがあったからこそ、提案を受け入れることになったと思う。